適塾の塾頭をした筑後久留米藩医松下元芳

中山茂春

緒方洪庵の適塾は天保九年（一八三八）に瓦町で始まったが、天保十四年（一八四三）十二月に過所町に移っている。姓名録は天保十五年（一八四四）一月より記帳を始めて、元治元年（一八六四）七月で終っている。塾生の数は六三六名、伴忠康先生の「適塾と長与専斎」[1]の本によれば、塾頭をしたのは微かに十五名の名前があり、次の人達である。

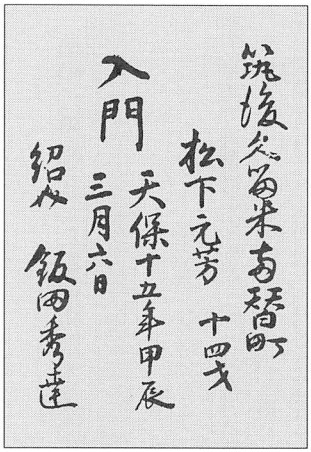
緒方郁蔵（天保九年〈一八三八〉塾頭）。有馬摂蔵（東讃州寒河郡冨田中邨・天保十一年〈一八四〇〉塾頭）。村上代三郎（播州加東郡木梨村・天保十一年〈一八四〇〉塾頭）。奥山静叔（肥後山鹿湯町・天保十一年〈一八四〇〉入門、弘化二年〈一八四五〉塾頭）。久坂玄機（嘉永元年〈一八四八〉塾頭）。村田蔵六（大村益次郎・防州吉敷郡鋳銭司村・弘化三年〈一八四六〉入門、嘉永二年〈一八四九〉に塾頭）。飯田柔平（防州隆松・弘化一年〈一八四四〉入門、嘉永三年〈一八五〇〉塾頭）。伊藤慎蔵（長州萩浜崎・嘉永二年〈一八四九〉二月八日入門、嘉永四年〈一八五一〉に塾頭、又安政元年〈一八五四〉にも再び塾頭とある）。渡辺卯三郎（加州大聖寺藩・嘉永一年〈一八四九〉に入門、嘉永六年〈一八五三〉に塾頭）。栗原唯一（京都室町下立上ル・嘉永三年〈一八五〇〉入門、安政二年〈一八五五〉に塾頭）。松下元芳（筑後久留米両替町・嘉永七年〈一八五六〉五月七日入門、安政三年〈一八五六〉に塾頭）。福沢諭吉（中津藩・安政二年〈一八五五〉三月九日入門、翌年に塾頭）。長与専斎（肥前大村・嘉永七年〈一八五四〉六月二十八日入門、安政五年〈一八五八〉に塾頭）。山口良哉（浪速・安政三年〈一八五六〉二月一日入門、万延一年〈一八六〇〉に塾頭）。柏原学介（讃州高松・嘉永七年〈一八五四〉七月二十三日入門、文久二年〈一八六二〉に塾頭）。

この時代の適塾は、当時の日本における最高学府と考えられるので、塾頭になった人が如何に秀才であったかが窺える。松下元芳、福沢諭吉、長与専斎の三人はいわば同期の桜で、しかも三人とも九州出身であった。そのためか同胞の如く仲が良かったと伝えられており、共に塾頭をしている。三人の中では長兄というべき存在であった松下元芳（**写真1**）について紹介したい。

写真1　松下元芳（二代）

松下元芳（二代）は天保二年（一八三一）に筑後久留米藩医牛島養朴の二男として出生している。幼名は寿太郎。後に両替町の伯父松下養安（初代元芳）の養子となる。系図にある如く実父の牛島養朴は松下寿庵の子であるから、松下元芳（二代）は本来松下家の血筋そのものである。また、松下養安が後に松下元芳と名乗っているので、松下元芳（二代）として区別したほうが良いようである。天保十五年（一八四四）三月六日に日田の広瀬淡窓の咸宜園に入塾している。

資料1は松下元芳（二代）が咸宜園入塾時の直筆の署名。これは大分県日田市において平成二年十一月に咸宜園門下生子孫全国同窓会なるものが開催された際に手に入れたコピーである。この同窓会の副会長は大村益次郎の子孫の大村泰敏氏で私は監事をしていた。実物は門外不出。私は中山家の先祖のものを三枚手に入れていたが、最終日の帰り際に松下元芳のものが残っていたので、子孫が会に欠席の為と判断して松下元芳のものも私が持ち帰った。

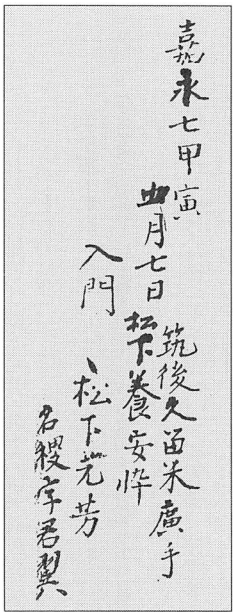


資料1　日田の広瀬淡窓の咸宜園に入門時の直筆の署名

元芳（二代）は帰藩後、藩医中島泰民に蘭医学を学んだ。中島泰民は牛島養朴と共に弘化三年五月十五日に適塾に入門して蘭学と蘭方医学を修め、帰藩して久留米藩の西洋医学の普及に尽力した医師である。[2] 元芳は、中島泰民や牛島養朴の勧めで適塾に入門している。**資料2**は彼が適塾入門時の直筆の署名である（適々斎塾姓名録より）。

前記のように松下元芳は福沢諭吉や長与専斎よりやや先輩格であるが、安政三年（一八五五）に塾頭となった彼は、その年の秋に帰藩している。松下元芳の後は福沢諭吉が継いで塾頭となっている。福沢諭吉は『福翁自伝』の中の緒方の塾風の項で松下元芳との思い出話を次のように述べている。

「私と先輩の同窓生で久留米の松下元芳という医者と二人連れで、御霊という宮地に行って夜見世の植木を冷やかしている中に、植木屋が『旦那さん、悪さをしてはいけません』と言ったのは、吾々の風体を見て万引をしたという意味だから、サア了簡しない。まるで弁天小僧みたいに捏繰り返した。



資料2　適塾入門時の直筆の署名（適々斎塾姓名録より）

『何でもこの野郎を打ち殺してしまえ』と私が怒鳴る。松下は慰めるような風をして『マア殺さぬでも宜いじゃないか』『ヤア面倒だ。一打ちに打ち殺してしまうから止めなさんな』と、それこれするうちに往来の人は黒山のように集まって大混雑になって来たから……」[3]。

松下と福沢は同胞のように仲が良かったと伝えられている。大阪の生活においては、勉学においても遊びにおいても二人で過ごす時間が多かったようである。

また、長与専斎の『松香私志』[4]の中には次の如くある。

「余か入塾せる時の塾頭は伊藤愼蔵（長州の人）とて越前大野藩に聘せられ、其次は栗原唯一（京師の人）とて水戸藩に雇はれぬ。其後は久留米の人松下元芳、中津の人福澤諭吉相踵きて塾頭となれり。松下は藩に歸りて後いく程もなく病歿し、伊藤・栗原の二人も今はなき人の數に入りぬ。ひとり福澤氏は其後東京に出て英學を修め、慶應義塾を開きて大に英才を養成し、文明の先導者として一代の敬崇する所となり、老益壯にして昔日の元氣に殊なることなし」。

安政三年（一八五六）秋に帰藩後の松下元芳は、同志と共に藩内に西洋医学の普及に努めるのである。工藤謙同に端を発した久留米藩の西洋医学は適塾門下生達の尽力と真木和泉守らの努力によって文久三年（一八六三）三月に久留米藩医学校である「医学館」（のちの好生館）の設立となるのである。これが現在の久留米大学医学部の渕源である。

久留米医学館設立より数年前、緒方洪庵が福岡藩の武谷祐之（椋亭）に宛てた手紙が残っている。武谷椋亭は天保十四年（一八四三）に適塾に入門している。適塾より帰藩した武谷椋亭の意見で創立された福岡藩の医学校である賛生館が後の九州大学医学部の渕源となるのであるが、この武谷椋亭に対して緒方洪庵は安政四年（一八五七）十二月二十日附の手紙にこう記している。「久留米之松下君当秋より帰国いたし居候、同人は急度御役に相立候人物に御座候。何卒洋学之事に付御用之事も候はば同人へ御相談有之候而も可宜と奉存候」[5]。

これを見ると緒方洪庵がいかに松下元芳を信頼していたかが窺える。この手紙等については元福岡大学教授井上忠先生が西南学院大学助教授時代に発表された『武谷家所蔵蘭学者書翰の紹介』という論文中に記載されている。

慶応年間に久留米藩政府の中心人物で進歩的な今井栄（明治二年保守的尊攘党政府成立後切腹）は時勢を先見して久留米藩に英語学校創立を建議した。今井は松下元芳と福沢諭吉が適塾での親友であることもあり、松下に命じて慶応義塾で英学を学ばせた。福沢にとっては松下は適塾の先輩であり、しかも自分の一代前の塾頭をした人物であるので、慶応義塾に入塾というのではなく賓客として待遇したと伝えられている。

久留米藩奥医師の玉井忠田の日記[6]によれば、慶応二年六月に松下元芳は藩主有馬頼咸の正室である精姫（あき）（将軍徳川家の養女、実は有栖川韶仁親王の王女韶子）のお付きの医師（奥詰医師）として江戸に行き、福沢諭吉のもとへ通っていたようである。

松下家・牛島家・中山家と玉井忠田の関係略系図

- 藩医一代 松下正蔵
  - 医二代 元丈
    - 医三代 寿庵
      - 医四代 養安（初代元芳）
        - ※医五代 元芳（二代）
          - 医六代 牛島済民（適塾入門簿には松下済民と署名）
            - 海軍中将 丈吉
              - 元
                - 高興
      - 藩医五代 牛島家へ養子 養朴
        - ※松下家へ養子 牛島寿太郎（松下元芳二代）
      - シマ 中山琳庵に嫁す
        - 医五代 中山元琳（二代）
          - 医六代 寧（やすし）
- 藩医一代 中山道可
  - 医二代 元琳
    - 医三代 道可（二代）
      - 医四代 琳庵
        - 医五代 中山元琳（二代）
  - 御祐筆 龍右衛門
  - 漢学者 清左衛門
    - 林陽
    - 漢学者 圓平
      - 儒学者 泰橘（たいきつ）
        - 観相学者 時三郎（石龍子）
        - 漢学者 石庭
          - 医師 弘道
            - 医師 和道
          - 医師 為春
            - 医師 茂春（筆者）
      - 藩医 元朴
    - 医師 寿建
      - 玉井忠田（中山元純）中山寿建の婿養子
      - けん

そして慶応四年三月二十二日の藩主夫人の江戸発、京都の実家行き迄勤めている。その後前出の日記によれば、慶応四年八月には御蔵米百五十石、父（初代元芳・元治二年没）の跡をうけ、奥医師として筑後久留米にいる記録があるが、この頃までに松下は久留米藩に請い、多数の英学書を江戸で購入している。この時に購入した英学書と松下が没するまでに手に入れた蘭医書を合わせて二十冊と写本七冊（**写真2**）が久留米市民図書館に保存してある。

しかし、帰藩した松下を待っていたのは藩政一変であった。勤王攘夷党の水野政権樹立に及び英語学校創立は退けられた。英語学校が立ち消えになった事を知った福沢諭吉は松下に上京を促し、また長崎病院からの招聘もあったが、藩重役の反対で実現されなかった。明治二年の分限帳に「御医師奥詰　祿百五十石　両替町」とある。松下は医学館では蘭医学の原書で医生に講義し、西洋医学の普及に尽くしたが、希代の学識を活用させる大舞台を得る間も無く明治二年（一八六九）十二月九日に三十九歳の若さで病没した。

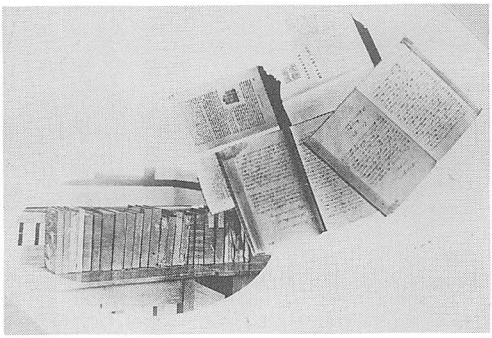


写真2　松下文庫（久留米市民図書館蔵）
適塾や慶応義塾で勉学の前後に購入した洋書（蘭書・英書）、写本等

辞世の詩は次の如くである。

「漢より出で蘭に入りまた英を学ぶ、羞ず、吾れ強いて仕えて未だ名を成さず。鏡に対し眩然として還りして一笑す。鬢辺染出す雪千茎」。墓碑は東京都渋谷区広尾五―一―二十一祥雲寺にある。

筆を置くに当り、ご指導いただいた元福岡大学教授井上忠様、郷土史家の古賀幸雄様、また写真を提供していただいた元神戸大学教授今津健治様に深く感謝いたします。

参考文献

（1）伴忠康『適塾と長与専斎―衛生学と松香私志―』十二頁創元社、一九八七年（昭和六十二年）
（2）篠原正一『久留米人物誌』三六六頁菊竹金文堂、久留米市、一九八一（昭和五十六年）
（3）福沢諭吉『福翁自伝』六九～七〇頁、岩波書店、一九七八（昭和五十三年）
（4）伴忠康『適塾と長与専斎―衛生学と松香私志―』一〇二

～一〇三頁、創元社、一九八七年（昭和六十二年）

（5）井上忠『武谷家所蔵蘭学者書翰の紹介』三の一二頁、西南学院大学文理論集第一巻第一号、一九六〇（昭和三十五年）

（6）『玉井忠田日記』田中芳胤編、六九一頁、七二二頁、七六七頁、七八九頁、玉井忠田顕彰会発行、一九八九年（平成元年）

（中山為春医院）